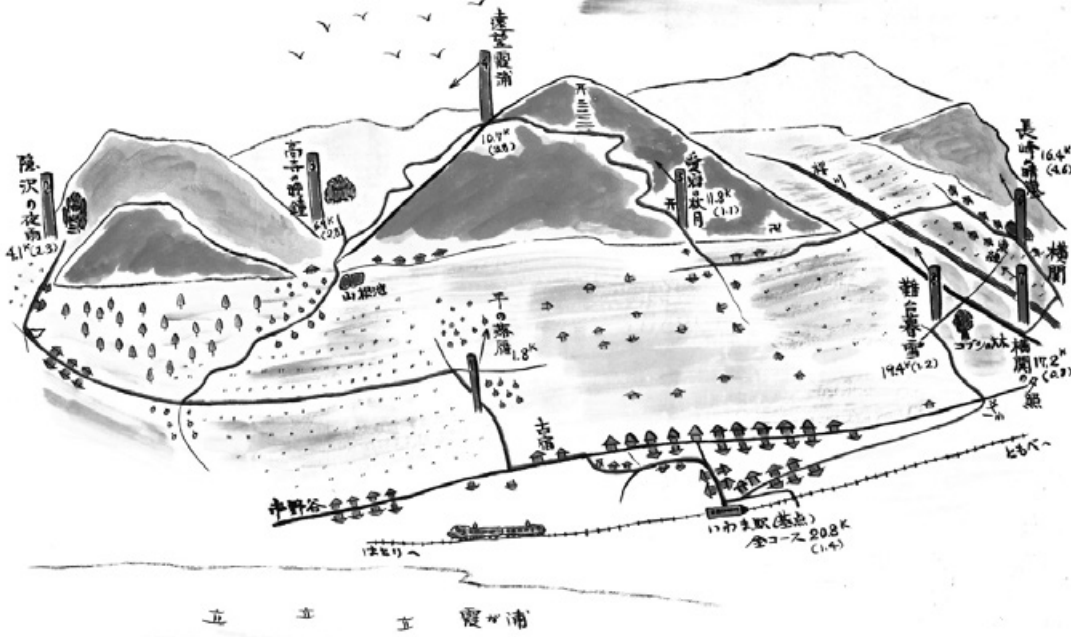


かさまのれきし

第64回



岩間八景（岩間ライオンズクラブ発行「土浦藩岩間八景」より）

明治時代の岩間八景

明治四十二年（一九〇九）、岩間村は、自治・行政、産業、景勝地などをまとめた『岩間便覧』を発行しました。この頃、近隣町村でも同様の刊行物が出版され、地域の歴史に目が向けられるようになりました。

その中に「岩間八景」の記述がみられます。八景とは、その地方の景色の良い場所を八か所選定し作られたものです。愛宕山、難台山を軸に八か所の景勝地が定められ、それぞれの場所に俳句が添えられています。作者である後藤秦枝は、もともと笠間藩家老阿久刀川大江氏の二男で、明治十七年（一八八四）、愛宕神社支配の密蔵院後藤家の養子となり、先代後藤正名氏の後を襲ぎ、愛宕神社、羽梨山神社、六所神社、近郊六社の社掌を兼務した人物です。桃園の俳名を持つ俳句に長ずる人物で、愛宕神社にある奉納俳句の中に桃園の名がみられます。八景の選定とその場を詠んだ俳句は今もなお岩間地方に残る景勝地と言えるでしょう。

岩間八景

桃園

- ① 平の落雁 落ち付きし雁や平夜の雨
（旧笠間街道（三五五号線）市野谷・平の湿地帯に降り立つ雁の群れ、背には愛宕山が聳える。）
- ② 隠沢夜雨 遁れ住む庵も静夜春の雨
（泉城の麓、安産祈願の女人信仰）
- ③ 高寺晚鐘 鐘の音も風ぎし小春の夕かな
（東谷山龍泉院、暮れ六つの鐘）
- ④ 遠望霞浦 帰り来る白帆の上や夕霞
（愛宕山頂上より視界壮大、煙雨霞むもよし）
- ⑤ 愛宕秋月 月影や並びて高き山の鼻

（月明に仰ぐ愛宕のシルエットは詩情を誘う）

⑥ 長峯晴嵐 晴れて行く野分の後や群鳥
（静かなる山の佇まい、吹く風に長峯沼の小波の風情佳し）

⑦ 横関夕照 夕立の洗いて行し入日かな
（横関より難台、愛宕を望む夕焼け、五合田圃郷愁遙か）

⑧ 難台暮雪 見る度に心は寒し雪の峰
（南朝の哀史を秘め、暮雪の難台想い深し）

また、八景のモデルは、中国の「瀟湘八景」といわれています。わが国では「近江八景」「金沢八景」等が有名ですが、近隣の「水戸八景」もその名を今に残しています。天保四年（一八三三）、徳川齊昭が水戸藩領内の景勝地八つを選んだといわれています。各景勝地には斉昭自筆の隷書銘を刻んだ碑が置かれています。景勝地を楽しむばかりではなく、藩子弟の心身鍛錬のため、各碑を巡らせるためともいわれています。巡ると二十里に余れり」としていますので、約八十キロメートルといったところでしょう。岩間ライオンズクラブが、昭和六十年代に創立十五周年記念企画として「岩間八景」のパンフレットを作りました。それによるとJR岩間駅を出発して巡ると約二十キロメートルの行程になっています。今もその景観は健在ですので巡ってみてはいかがでしょう。しかし、水戸八景のように、これといった目印がありません。自分なりの景勝地を選定してみるのも新たな発見になるかもしれません。

（市史研究員 川崎史子）